

芸術作品の中で、特に平面作品において、鑑賞者は、より視覚的に受け止めるしかありません。彫刻や、オブジェ、インスタレーション等の三次元上に広がる立体作品とは異なり、そこに「枠（わく）」がなければ、たとえその作品の説明や理論が明解なものであっても、鑑賞者の視覚、視覚体験へのアプローチ＝“作品と対峙する”という静的な時空間は提供し難いのです。つまり平面作品にとっての「枠」＝「額縁」とは、作品鑑賞という特異な状況や、それが要求する種々の条件から、二次元の世界と三次元の世界の接点として、必然的に存在せざるを得ないと私は考えるのです。

現在のアートシーンは、建築空間（これそのものを枠とする指向性）と直結した芸術制作を主張する声の高まりとともに、額縁や額装を脱ぎ捨てて外へ飛び出そうとする衝動と試みの連続であります。しかし、平面作品に「枠」がなければ、壁面上に掛けられた（もしくは床上に無造作に置かれた）作品に完結性は与えにくく、作品がもつ存在感、そのパワーや重量感は単なる「イメージ」のような印象でとらえられる危険性があります。作者の「表現」を、視覚的に正しく伝えることは、空間設定と枠を含む「額装」によって、はじめて完結性を持った「作品」になるのではないかと、私は考えているのです。ただ、作品を大袈裟に見せたい、ということでは決してありません。

現状の写真作品の定番的な展示やトレンドから、額装芸術による一步踏み込んだ「表現への実現」――。これは、作品の価値向上の為であり、また作品を「よりリアルに体験してもらおう」が為であり、作品を完成度の高い一枚のシートとしてだけ捉えるのではなく、その作品と作者がもつ内面的なものにどこまで迫れるか？という「問い」でもあります。もちろん、その「問い」への解釈は千差万別、多種多様となりますが、額装者サイドは、いち鑑賞者として、作品鑑賞時におけるいたってシンプルな感動体験を基調とし、作品を個人的に読み解く、感性、衝動、また配慮の上、その感動体験を額装によって表現することが求められます。こういった総合的な視野、視覚への配慮というものが、現状の写真の展示を含め、アートシーンには欠けているように私には思われます。

今という時代は、感動することさえもがいわゆる社会的評価や流行等、誰かの規範に従う傾向があります。それゆえ、ある素晴らしい作品を目の前にしても、溢れかえる情報、カテゴリーであったり系統区分がフィルターとなり、生々しい感動体験を得ることが難しくなっています。素晴らしい、完成度の高い作品とは、「絶対的な存在感」を持つべきである芸術にだけ許されたことです。「これは写真？」という驚きや違和感、言葉に変換されることのない「感動」を、額装によってあらためて明確にすべき時だと感じます。そして、もしこれが可能ならば、それは一枚のシートである写真作品にとって決して時代錯誤的なことではなく、十分に肯定的なことだと思われまます。鑑賞を終えてからそれが写真であることを知らされる、これは「写真とは何か？」の問いに繋がり、さらに世界とは？芸術とは・・・？作者の人物像や世界観、哲学までも浮かびあがり、こうして額装の役割は果たされると私は考えるのです。

額装、縁（フレーム）とは、主題である作品（対象）と、自分との距離や大きさを計るために囲うところから始まります。人と社会がそうであるように、「平面作品と額縁」というごく自然で当たり前の関係です。

さらに、額装とは、額装者が、作品と向かい合い、感じ、想像し、予感し、決め、作者の手元から手放してあげること、そのお手伝いをするすることでもあります。そしてこの技術、表現とは、万事「控えめ」をもってよしとする美学であり、決して額縁が主題になってはならない、これは最低限のルールです。とにかく作品の意図、主題をさりげなく高めること、そして鑑賞者に向けて、作品そのものとの出会いをよりリアルなものとする。展示が方法なら、額装はスタイルやシルエットにも当たりますが、当然のことながら、出過ぎれば額装によって作品の印象を変えてしまう、台無しにする恐れがあり、これについては十分な配慮と注意が必要です。

私に関して言えば、フレームデザインやサイズ決定において、作品を読めないから排除するのではなく、読むために排除し施します。そしてその選択には、最先端なものからクラシカルなものまで、いろいろありますが、決定に際しては、技術革新や新しい素材によるモダンな額装表現と、時代性をまとったクラシックなスタイルとは、共に「今」を表現する手段であることから、すでに同じ位置づけになるかと思えます。つまり私の内ではクラシカルもモダンも無い、ということです。そしてこの位置づけが、作品に迫る私のスタイルであり、作品に内在する作者の感動体験と、作者自身もまだ気づいていない作品に内在する力、メッセージ等を読み解きつつ、具現化しようと努める、これが私の役割であり、「仕事」なのです。